

# 大学生における不適応的な自己抑制

—甘えに焦点を当てて—<sup>1</sup>

小西純子<sup>2</sup>・重橋のぞみ

## Research of Inappropriate Self-inhibition in College Students ～ factor of amae ～

Ayako Konishi · Nozomi Jyubashi

### 問題と目的

人は対人場面において様々な自己抑制を行っており、親密な関係であっても、必ず自己抑制を行っている（小澤・下斗米，2014）。他者と関わる場合や課題を達成する場合に、自己抑制は必要である。柏木（1988）は子どもが達成すべき発達課題として、自己抑制と自己主張・実現がバランスよく発達することが重要であることを指摘し、自己抑制が仲間との協調性につながると述べている。さらに木野本（2002）は、対人関係では、いつも自己抑制的に行動することが望ましいと主張している。先行研究では、自己抑制・自己主張ともに行っていると認知している幼児について、自由遊び場面で自発的な向社会的行動を多く取ること、自己と他者ともに向社会的であると認知していること、思いやりが豊かであることがわかっている（伊藤・丸山・山崎，1999；伊藤・樟本・山崎，1999；森下，2000）。

一方で、自己抑制には不適応的な側面も含まれる。小澤・下斗米（2014）は、自己抑制を自己抑制前・自己抑制中・自己抑制後の3段階に分け、それぞれ自己制御の困難、目的の欠如、利他的行動の負債感が不適応に導くものとした。また、自己抑制型特性（通称：イイ子症候群）は信頼性、自律性、自主性、抑うつ・神経症状、心身症といった情緒症状と正の関連があること（宗像，1997；菊池・岡本，2008）が明らかとなっている。加えて丸山（山本）（2009）は、対人的な自己主張及び自己制御的行動は、人間関係や生活環境の変化、あるいは対人不安などと密接に関連すると述べている。すなわち、不適応的な自己抑制が強い人に転勤や引っ越しのような環境の変化、家族関係・友人関係の悪化が生じると、不適応的な自己抑制が一層強くなり、困難に陥る確率は上昇すると考えられる。これらの研究から、不適応的な自己抑制は心身や日常生活に悪影響を及ぼしやすいと言えるだろう。そのため、不適応的な自己抑制について調べることは、不適応的な自己抑制をする人が持つ特性を理解し、その対象者たちの実態を把握することに繋がるだろう。

さらに対象者たちの援助方法を見出すことも可能になると考えられる。

現代の大学生は、集団への自己の位置づけや所属意識が稀薄になるため、身近な集団に受け入れてもらうために強迫的な努力と気遣いを行うことが多くなること（岡田，1988）、他者からの評価を過剰に意識すること（金子，2012）が言われている。また、現代青年の特徴として、友人関係が希薄化していることも挙げられている（白井，2006）。大学生の友人関係について調査をした松永・岩元（2008）は、現代青年の特徴として、友人との深い関係を避け、楽しくいようとする「うわべ群」があることを指摘し、「うわべ群」は深い関係を好んで避けているのではなく、友人を傷つけること、友人の評価を気にすることから深い関係に踏み込めないでいると言及している。さらに、吉田（2003）は5つの大学を対象に大学生の友人関係の特徴を調べたところ、友人との価値観の違いを実感するのを避けるために、本音を言わず防衛的に友人と関わっている群があることを発見した。これらの研究から、現代の大学生は人に対して本心を隠したまま付き合っている人が少なからず存在し、困ったときでも親しい人に相談することができていない可能性がある。よって、大学生を対象に本研究を進めることは意義のあることだと考えられるだろう。

小西・重橋（2017）は不適応的な自己抑制に関する研究を行っており、不適応的な自己抑制について「対人場面で自分の欲求や行動を抑制・制止しなくても良い時、且つ、言いたいことがある時、それを抑制する行動」と定義している。小西・重橋（2017）の研究では、自己抑制場面を2種類に分け、各場面に影響する要因（「スキル不足要因」「自分志向要因」「相手志向要因」「規範・状況要因」「拒否回避傾向」「相互依存的甘え」「屈折した甘え」）と自己抑制のタイプ（柔軟群、自己抑制群、自己主張群）によって影響を与える要因に差があるのかを調べている。「適応的な自己抑制場面」では「自分志向要因」「規範・状況要因」が正の影響を、「不適応的な自己抑制場面」では「相互依存的甘え」が負の影響を与

えていることが判明し、甘えが不適応的な自己抑制に関連していることが示唆された。さらに、影響要因を群別に見た結果、「相互依存的甘え」は自己抑制群が柔軟群よりも少なく、どの場面でも自己抑制行動を取る人は健康的な甘えが育っていない可能性が明らかとなり、甘えと自己抑制行動の関連を検討する必要がある（小西・重橋, 2017）と述べられている。

土居（1971）が「甘え」を取り上げて以来、「甘え」の問題は日本人の対人関係やパーソナリティなどを理解するうえでの重要な概念として論じられてきた。「甘え」には、「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の2種類が存在する（土居, 1971）。玉瀬・相原（2004）は、土居（1971）が述べた「健康で素直な甘え」に近い概念である「相互依存的甘え」を測ることのできる、多元的「甘え」尺度を作成した。また、玉瀬・相原（2005）は相互依存的甘えが、思いやりや他者への信頼に影響を与え、屈折した甘えが、不信や自己愛に影響を与えることも明らかにした。甘えとは「相手の好意を当てにして振る舞うこと（土居, 2001）」であり、甘えは日本特有の言葉で、日本は相手に甘えられることを積極的に評価する文化であるが、一方で、甘えることが下手な人は辛さを抱え込みやすいことが指摘されている（土居, 1971）。これらのことから甘えが不適応的な自己抑制に関連していることが推測できる。

以上のことから本研究では、小西・重橋（2017）で指摘されていた「甘え」に焦点を当て、不適応行動との関連を明らかにする。また、相互依存的甘えの下位尺度である、自分が相手に甘えたい気持ちを表す「甘え」、相手に甘えられたい気持ちを表す「甘えられ」に各群別に差があるのかを明らかにする。

なお、各群については先行研究と同様に「柔軟群（自己抑制をすることが適応的な場面で自己抑制を行い、自己抑制をしなくても良い場面で自己抑制を行わない群）」、「自己抑制群（自己抑制をすることが適応的な場面で自己抑制を行い、自己抑制をしなくても良い場面でも自己抑制を行う群）」、「自己主張群（自己抑制をすることが適応的な場面で自己抑制を行わず、自己抑制をしなくても良い場面でも自己抑制を行わない群）」を用いる。

## 方法

### 調査対象

小西・重橋（2017）の研究で協力した回答者のうち、同意を得られた福岡県内のF大学の学生40名に質問紙調査を依頼した。

### 調査時期

2015年11月に実施した。

### 調査方法

大学で行われている講義で質問紙を配布し、後日研究

者が質問紙を回収した。予め調査目的を説明し、調査への協力に同意をしたものを対象者とした。なお、調査は無記名回答で任意であること、回答の拒否や中断は可能で、それによる不利益は生じないことを質問紙の表紙に明記し、口頭でも説明したうえで調査依頼を行った。

## 3. 質問紙の構成

質問紙は（1）フェイスシート（2）甘え尺度（3）自由記述から構成される。

### （1）フェイスシート

記入年月日、性別、年齢、学年について回答を求めた。また、小西・重橋（2017）では研究の連続性のために本人だけがわかるパスワードの記載を求めている。本研究では回答者全員のパスワードを一覧表に示し、自分のパスワードに丸を付けるよう求めた。なお、パスワードを忘れた場合は、一覧表の右下に記述した“忘れた”の文字に丸を付けるよう指示した。

### （2）甘え尺度

玉瀬・脇本（2003）の大学生「甘え」尺度で用いられた「甘え」「甘えられ」の調査項目全38項目を使用した（表1）。各項目について「いつもそう思う」から「全くそう思わない」までの4件法での回答を求めた。

### （3）自由記述

悩みごとがあるとき、“どのような相手に対して”“どのような状況のときに”最も打ち明けやすいかを自由に書いてもらう欄を設けた。

## 結果

パスワードを忘れた者3名を除外した後に、各群の人数の割合を見たところ、柔軟群が19名、自己抑制群が15名、自己主張群が3名であった。自己主張群の人数が極端に少ないため、今回の分析では除外し、柔軟群19名、自己抑制群15名の合計34名のデータを分析対象データとして扱うことにした。なお、分析対象の間隔尺度が欠損である場合は、平均値を代入したうえで、分析を行った。

### 1. 各項目の因子分析結果

各因子の合成変数の平均値と信頼性係数をまとめたものを表2に示す。

#### 「甘え」尺度

今回の研究では、玉瀬・脇本（2003）で明らかとなった「タテ関係」「ヨコ関係」を見ずに分析を進めるため、大学生用「甘え」尺度の「甘え」下位尺度を因子に固定し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子名は先行研究にならない「甘え」とした。

#### 「甘えられ」尺度

「甘えられ」下位尺度項目11項目も同様に1因子に固定し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、因子名は先行研究にならない「甘えられ」とした。

表1 「甘え」尺度の項目

1	自分の体調がすぐれないときは、友だちをあてにしたい
2	他の兄弟（姉妹）が親と口論したときは、自分に助けを求めにきてほしい
3	将来どの職業につくべきか迷っているとき、親に決めてもらいたい
4	進学に悩んでいる知り合いの中学生・高校生は、自分に相談してほしい
5	自分の髪型が気になるときは、友だちにアドバイスをもらいたい
6	友だちとけんかをしたときは、他の友だちに何とかしてもらいたい
7	集団にとけ込めないときは、その中の人に察してもらいたい
8	友だちが授業についていけないときは、自分に助けを求めてほしい
9	友だちが落ち込んでいるときは、自分に相談してほしい
10	家族の雰囲気が気まづくなったときは、親に何とかしてもらいたい
11	親がお金を必要とするときは、自分をあてにしてほしい
12	将来どの職業につくべきか迷っているとき、教官に頼りたい
13	親の体調がすぐれないときは、自分をあてにしてほしい
14	友だちがほかの友だちとけんかをしたときは、自分に相談してほしい
15	友だちが大学生生活に張り合いがないときは、自分を頼りにしてほしい
16	友だちが髪型を気にしているときは、自分にアドバイスを求めてほしい
17	自分がお金を必要とするときは、親をあてにしたい
18	異性との交際について不安があるとき、友だちに後押ししてもらいたい
19	友だちとけんかをしたときは、親に相談したい
20	同じクラブ・サークルの友だちが、その活動に対して楽しくないときは、自分を頼りにしてほしい
21	テスト勉強がうまくいかないときは、先輩をあてにしたい
22	親同士がけんかをしたときは、自分に相談してほしい
23	後輩のテスト勉強がうまくいかないときは、自分をあてにしてほしい
24	進級が危ぶまれるときは、教官を頼みにしたい
25	自分が落ち込んでいるときは、友だちに慰めてもらいたい
26	友だちのテスト勉強がうまくいかないときは、自分に助けを求めてほしい
27	授業についていけないときは、教官に相談したい
28	大学生生活に張り合いがないときは、友だちに何とかしてもらいたい
29	友だちの体調がすぐれないときは、自分をあてにしてほしい
30	兄弟（姉妹）がお金を必要とするときは、自分をあてにしてほしい
31	クラブ・サークルが楽しくないときは、その人たちに何とかしてもらいたい
32	友だちが集団にとけ込めないときは、仲間とうまくいくように自分を頼ってほしい
33	自分の体調がすぐれないときは、親をあてにしたい
34	家族の雰囲気が気まづくなったときは、自分に頼ってほしい
35	友だちが異性との交際について不安があるときは、自分に相談してほしい
36	テスト勉強がうまくいかないときは、友だちに助けを求めたい
37	授業についていけないときは、友だちに助けを求めたい
38	兄弟（姉妹）で口論したときは、親に仲裁してもらいたい

表2 各合成変数の平均値と信頼性係数（Cronbachのα）

	MEAN	(SD)	α
甘え			
『甘え』	2.71	(0.48)	.85
『甘えられ』	2.44	(0.57)	.86

2. 各群と甘えの種類別による得点の関連

独立変数を群（柔軟群・自己抑制群）と甘えの種類（甘え・甘えられ）、従属変数を甘え得点とし、2要因の分散分析を行った。その結果、甘えの種類の主効果が得られ ( $F(1, 32) = 13.08, p < .01$ )、『甘え』のほうが『甘えられ』より有意に得点が高いことが示された。群の主効果は得られなかったが、甘えの種類と群の交互作用が有意であったため ( $F(1, 32) = 4.21, p < .05$ )、単純主効果の検定を行った。

『甘え』における群の単純主効果は有意ではなかったが、『甘えられ』において、群の単純主効果が有意であった ( $F(1, 32) = 5.74, p < .05$ )。ペアごとの比較を見ると、

自己抑制群より柔軟群のほうが『甘えられ』の得点が高いことが明らかとなった。柔軟群では、甘えの種類の単純主効果は有意ではなかったが、自己抑制群において、甘えの種類の単純主効果が得られた ( $F(1, 32) = 14.37, p < .01$ )。ペアごとの比較を見ると、『甘えられ』より『甘え』のほうが甘えの得点が高いことが明らかとなった。その結果を表3、図1に示す。

3. 記述内容から見た柔軟群、自己抑制群の違い

自由記述で得られた内容を表4に示す。

相談する相手を見ると、柔軟群と自己抑制群ともに親、母親、家族、友人、親友を挙げており、柔軟群はそのほかにも親戚、恋人、年上といった内容が見られたが、

表3 各群×甘えの種類別にみた甘えの平均値及び分散分析結果

『甘え』	主効果(F値)		各群	交互作用(F値)
	柔軟群 (N=19)	自己抑制群 (N=15)		
『甘え』	2.78 (0.11)	2.68 (0.12)	13.08 **	4.21 *
『甘えられ』	2.63 (0.12)	2.25 (0.13)	3.37	

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

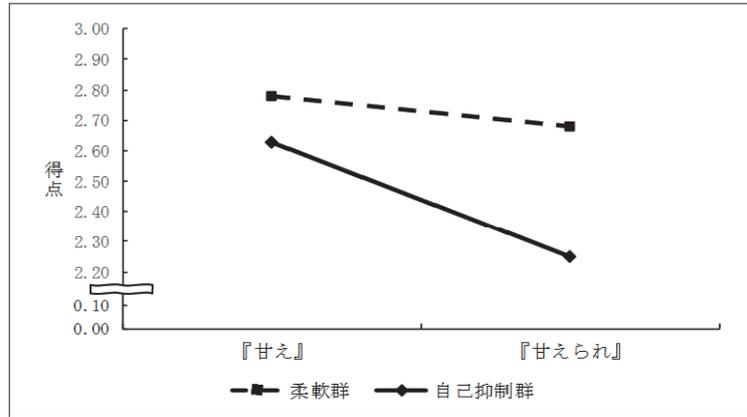


図1 各群×甘えの種類別に見た甘えの得点

表4 自由記述内容

	人	場面
柔軟群	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 母親 (3)</li> <li>・ 学校の友達 (2)</li> <li>・ 友達 (3)</li> <li>・ 特に信頼している友達</li> <li>・ 付き合いが長い友達</li> <li>・ その悩みに全く関係のない友人</li> <li>・ 親 (2)</li> <li>・ 家族</li> <li>・ 親戚</li> <li>・ 親友</li> <li>・ 恋人</li> <li>・ 年上で信頼できる人</li> <li>・ 心に余裕がありそうで、忙しくない同年代か年上の方</li> <li>・ 話をすべて聞いてくれる相手</li> <li>・ 時計を気にしない相手</li> <li>・ 相槌を打ってくれる相手</li> <li>・ 口が軽くない人</li> <li>・ 良く話を聞いてくれて、その人の考え方にいつも共感できる人</li> <li>・ 尊敬している人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2人きりのとき (4)</li> <li>・ 2人きりとか人があまりいない状況</li> <li>・ その人だけのとき</li> <li>・ 2人でご飯を食べているとき</li> <li>・ 食事中あるいは大学のラウンジ等で雑笑中</li> <li>・ 学校の空き時間に</li> <li>・ 時間に余裕があるとき (2)</li> <li>・ リラックスできる場所で</li> <li>・ 食べ飲みしながら</li> <li>・ SNS上</li> <li>・ どんなことでも</li> <li>・ 相手も悩みを相談してくれたとき</li> <li>・ 悩みがあまり深刻でないとき</li> <li>・ 聞いてアドバイスがほしい</li> <li>・ 自分が苦しいとき</li> <li>・ 1対1で相手も自分も余裕があるとき</li> <li>・ 人間関係やバイトでの悩み</li> <li>・ 進路について悩んでいるとき</li> <li>・ 別の友達との人間関係、トラブル (喧嘩) に悩んでいてどうしていいかわからない状況</li> <li>・ 迷っているとき</li> </ul>
自己抑制群	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 親 (5)</li> <li>・ 母親</li> <li>・ 家族</li> <li>・ 友人</li> <li>・ 友人など、話しやすく、状況を理解してくれているとき</li> <li>・ 同じ趣味、私の考えをわかってくれる (理解のある) 友達</li> <li>・ なんでも打ち明けることのできる親友</li> <li>・ 親友</li> <li>・ 友人 (一番仲のいい人)</li> <li>・ 親しい友達</li> <li>・ 一番話を聞いてくれそうな人</li> <li>・ 自分と同じ立場に立ったことがある人</li> <li>・ いつも自分の側にいてくれた人</li> <li>・ 自分が絶対に信用できる人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2人または3人きりの時 (少人数の時)</li> <li>・ 周りに誰もおらず、相手と2人になれたとき</li> <li>・ なんとなく</li> <li>・ 2人で会って食事をしているとき</li> <li>・ 相手と自分の悩みに近い話題を話しているとき</li> <li>・ 電話</li> <li>・ 家にいるとき</li> <li>・ 適当な時に</li> <li>・ 他愛のない話をしているとき</li> <li>・ 家でくつろいでいるときに話しやすい</li> <li>・ 自分の内面に深く関わることはほぼ相談せず、どうでもいいような、内面に深く関わらないことを相談する。そのため、いつでも相談するので、特定した状況はない</li> <li>・ 自分がどうしたらいいのかよくわからないとき</li> <li>・ 友人との喧嘩</li> <li>・ 本当に自分一人ではどうしようもないとき</li> </ul>

( ) 内は、同一回答者の人数

自己抑制群はそのような記述は見られなかった。また、柔軟群は「時計を気にしない相手」「相槌を打ってくれる相手」と自分が相談しているときでも、相手の様子を見ているような記述があったが、自己抑制群にはそのような記述は見られなかった。

相談する状況を見ると、2群とも相談したい相手と2人きりのときを挙げており、柔軟群は場面について多くの内容が書かれていたが、自己抑制群はあまり多く書かれていなかった。加えて柔軟群は、「相手も自分も時間に余裕があるとき」「リラックスできる場所」というように、相手の状況を見たり、相談する場面を自分で用意したりするような内容が多く書かれていた。また、「食事をしながら」を多く挙げていたことも特徴的であった。一方、自己抑制群の相談する場面を見ると、「適当なとき」「他愛のない会話をしているとき」「相手と自分の悩みに近い話題を話しているとき」など、そのときの流れや様子に合わせたような記述が多かったことが特徴であった。

## 考察

2要因の分散分析の結果より、柔軟群、自己抑制群ともに相手の甘えを受け止めたい気持ちよりも、自分が甘えたい気持ちのほうが大きいことが明らかとなった。これは、「甘え」という言葉は英語にはなく、日本語に特有なものであり、日本では「甘える」ことができることを積極的に評価する文化である（土井・斉藤，2010）ことが関係していると考えられる。すなわち日本では、相手に甘えることが受け入れられている故に、甘えることが行いやすい文化であることから、相手に甘えたい気持ちのほうが強く表れると推測される。また、甘えは男性よりも女性のほうが強い（藤原・黒川，1981）ことから、今回の研究においては自分が甘えたい気持ちのほうが強く表れたと考えられる。

また、自己抑制群においては、相手の甘えを受け止めたい気持ちが小さいことが明らかとなった。このことが生じた理由については、記述内容との関係から考察する。

記述内容を見ると、柔軟群は相談をしようと思ったときに、自分と相手の両方の状況を見ており、かつ正確に捉えているが、自己抑制群は自分と相手の状況を判断する力が曖昧であることがいえるだろう。このことから、柔軟群は自分の状況、たとえば、問題を自分一人で抱えておく余裕があるかなどを正確に把握することができており、自身の状況と相手の様子を捉えながら、適切に相手に甘えるため、相手から甘えられたい気持ちを持つ余裕ができることが推測される。しかし、自己抑制群は自分の状況の把握が曖昧もしくは過大であるため、常に余裕がなく、自分のことで精いっぱい状態であることが考えられ、相手から甘えられたいという気持ちをもつ余

裕さえも生まれないと思われる。

さらに詳しく見ると、①柔軟群は相談を持ちかける相手や状況が幅広いが、自己抑制群は狭いこと、②柔軟群は特定の相手に相談しようと思ったならば、相談できる状況を自分で作り相談できる機会を自ら手に入れようとするが、自己抑制群は特定の人に相談しようと思っても相談できる場を作らず、機会が訪れるのを待っていることが推測される。これらのことから、自己抑制群は相談をする相手や状況に対して慎重であり、また、相談しようと考えていても相手の迷惑や自分の評価が下がることを考えて身動きが取れない状況になりやすいと考えられる。このような特徴、すなわち、相手の状況を思うことや自分の評価を気にする傾向は、小西・重橋（2017）の結果で示された、自分志向の高さや相手志向の高さと一致する結果である。そのため、相手から甘えられたい気持ちを持つことができず、自己抑制群は「甘えられ」が低くなったのではないだろうか。

以上のことから、自己抑制群は相手に甘えられたい気持ちがあってもそれができないようなアンバランスな状態であり、生きにくさを感じていることが考えられる。この群の人たちが生きにくさを感じずに、日常生活を送ることができる方法について明らかになれば、不適応的な自己抑制を行う人への臨床的な支援に結びつくのではないかと考える。

## まとめと今後の課題

本研究では2群について甘えの面からどのような違いがあるのかを明らかにした。各群から甘えを見たところ、柔軟群、自己抑制群ともに相手から甘えられたいと思うよりも、自分が相手に甘えたい気持ちのほうが強いこと、甘えられたい気持ちにおいて、柔軟群よりも自己抑制群のほうが少ないことが明らかとなった。さらに、自己抑制群は柔軟群よりも自分と相手の状況を正確に把握する力が弱いこと、相手のことを慮ったり自分が傷つくことを恐れたりして相談することに慎重であることが記述内容から明らかになった。これらの結果から、自己抑制群は、相互依存的甘えができず、偏った見方をするために困ったときなどに援助を求めることができない可能性があると考えられる。

以上のことより、自己抑制群に該当する人への援助を考える際には、相互依存的甘えをいかに育てるかが重要になるといえるだろう。また、今回の研究で得られたことが援助の一助と成りえるのではないだろうか。さらに本研究から、自己抑制群は自分や相手の状態を正確に判断する力に乏しいことが推測された。そのため、自分や相手の状態を正しく把握する力を身につけることにより、不適応的な自己抑制を行うことから抜け出せるのではないかと考えられるが、これは推測の域を出ない。今後の研究では、自己抑制群とそれ以外の群とでは、状況を

正確に把握する力に差があるのかを詳細に検討する必要があるだろう。

また、今回の研究では人数の少なさから自己主張群を調査対象としなかったが、自己主張群も不適応的ではないかと考えられる。つまり、自己抑制をしたほうが良いときにもかかわらず、自分の気持ちを述べることで、「あの人は気が利かない」と思われやすく、人間関係に支障が生じる可能性が高いと思われる。そのため、自己抑制群だけでなく、自己主張群の検討も必要であろう。

## 謝辞

本研究にご助言をいただきました先生方、様々な形で支えていただきました方々、調査にご協力くださいました皆様に心より感謝いたします。

## 引用文献

- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文社.
- 土居健郎 (1997). 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版.
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂.
- 土居健郎・斎藤孝 (2010). 「甘え」と日本人 角川 one テーマ21.
- 藤原武弘・黒川正流 (1981). 対人関係における「甘え」についての実証的研究 実験社会心理学研究 21 (1), 53-62.
- 伊藤順子・楠本千里・山崎 晃 (1999). 自己制御認知タイプと向社会的行動との関連・向社会性に関する自己評価と仲間評価を観点にして 日本教育心理学会総会発表論文集 (41), 331.
- 伊藤順子・丸山 (山本) 愛子・山崎 晃 (1999). 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連 教育心理学研究, 47 (2), 160-169.
- 金子智明 (2012). 大学生の自己意識に関する研究 II : 自己意識がシャイネスと自尊感情に与える影響性 日本教育心理学会総会発表論文集 (54), 489.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会.
- 菊池由莉・岡本祐子 (2008). 大学生の「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連 広島大学心理学研究, (8), 99-106.
- 木野本はるみ (2002). 自己主張と自己抑制: 乳幼児期における保育のあり方 鈴鹿国際大学短期大学部紀

要 22, 1-11.

- 小西純子・重橋のぞみ (2016). 大学生における不適応的な自己抑制—抑制行動に影響を与える要因の検討— 福岡女学院大学人文科学研究科臨床心理学専攻, 14, 27-34.
- 丸山 (山本) 愛子 (2009). 自己調整能力の発達に関する大学生の自己認知—幼児期から青年期後期までの自己主張・自己抑制的行動の自己評価から— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 1, 学習開発関連領域, (58), 73-80.
- 松永真由美・岩元 澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究, 7, 77-86.
- 森下正康 (2000). 幼児期の自己制御機能の発達 (1) 思いやり, 攻撃性, 親子関係との関連 和歌山大学教育学部紀要教育科学 (50), 9-24.
- 宗像恒次 (1997). 本当の自分を見つける本: イイコ症候群からの脱却 P H P 研究所.
- 岡田 努 (1988). 学生相談からみた現代青年の特徴 文教大学保健センター年報, 8, 24-26.
- 小澤拓大・下斗米淳 (2014). 対人場面における自己抑制と不適応的との関連について: 研究の概観と今後の展望 専修人間科学論集, 心理学篇 (4), 21-26.
- 白井利明 (2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴: 変容確認法の開発に関する研究 (III), 大阪教育大学紀要, IV, 教育科学, 54 (2), 151-171.
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2004). 大学生の「甘え」と特性5因子の関係 教育実践総合センター研究紀要 (13), 23-31.
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2005). 相互依存の甘えと思いやり, 屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要, 人文・社会科学 54 (1), 49-61.
- 玉瀬耕治・脇本真希子 (2003). 大学生用「甘え」尺度の作成に関する研究 奈良教育大学紀要, 人文・社会科学, 52 (1), 209-219.
- 吉田浩子 (2003). 大学生の友人関係: 5つの大学におけるグループの特徴に関する調査から 川崎医療福祉学会誌, 13 (1), 173-186.
- 注1 本論文は小西純子 (2015年度) の修士論文の一部を修正加筆したものである。
- 注2 元福岡女学院大学人文科学研究科臨床心理学専攻大学院生